



「学校図書館とミステリ」

Q、「コラム N03」のインタビューにおいて、「SRマンスリー」にレポートを寄せられたと伺いました。

大村： 昨年8月、「学校図書館とミステリ」と題して習志野高校図書館の状況を書きました。我々マニアは往々にして若い人たちの読書状況については知らないことが多いので、ぜひ報告してほしいという依頼を受けたからです。

Q、ところで、今回で最終回となった《本格ミステリ入門(海外編)》についてですが、反響があったと伺いましたが…。

大村： 現在、神奈川県内のとある高校の「ミステリ研究同好会」で勉強用のテキストとして使用されているそうです。同じような年齢の高校生が系統立てて、外国の本格ミステリを読んでいくための道案内として役に立ってくれるのなら嬉しい限りです。

習志野高校生にももっと本格ミステリを読んでもらいたいので、次年度《本格ミステリ入門(日本編)》は「高校生対象」ということをさらに意識して書いていくつもりです。



それでは、「SRマンスリー 383号(2012年8月刊)」より「狂間 筑恵」名義でお書きになったレポートをご紹介します。

学校図書館とミステリ

狂間筑恵

本稿では現在の高校におけるミステリ読書事情について述べてみたいと思う。

現在筆者が勤めている習志野市立習志野高等学校は、おおよそ中から中の上レベルの学力をもった生徒が集まる、普通科と商業科より成る学校である。本校の最大の特徴は部活動が極めて盛んということで、特に野球部、男子バレー部、吹奏楽部は全国級の実績を誇っており、筆者が顧問をしている体操部も毎年インターハイに選手を送り出している。部活動で厳しく鍛えられているため、今時珍しい礼儀正しく気持ちの良い生徒が多く、この点においては最上級のレベルに属すると思う。一方、部活動加入率が95%もあり、その多くが年中無休で活動しているため、生徒たちには、勉強も含めて部活動以外に時間を割く余裕はほとんどない。当然読書をする生徒は少数派になる。本稿で述べるミステリ読書状況は、あくまでもこのような本校固有の状況であることを、了解していただきたい。一般に高校は学力に応じて輪切りになっているので、他校ではそれぞれの学力程度に応じて、違った状況になっていると思われるからである。

1. 現代学校図書館事情

本校の図書館は、蔵書数約3万8千冊、うち小説は約1万冊、ミステリはその2割程度である。このミステリの蔵書数は、筆者が高校生だった30数年前に比して、格段に多いと感ぜられる。あの頃の学校図書館といたら、純文学や実用書が中心で、ミステリはごくわずか、とても系統的に集めているとはいえない状況だったと思う。これは教師側にミステリを蔑視する気風があり、学校図書館にミステリはふさわしくないとみなす空気があったからだと思われる。かくいう筆者

も高校生の時、学校図書館にディクソン・カーの本を大量にリクエストしたにもかかわらず、1冊も買ってもらえなかった経験があり、そのことをいまだに恨みに思っている。(今考えると、ただ単に入手困難な絶版本だったからかもしれないが。)しかし現在では、学校図書館にミステリを入れることには何の抵抗もないという。

この変化の原因を分析してみると、第一にこの間に学校図書館の役割が変化してきたことが挙げられよう。かつては、学校図書館とは授業を補完することを目的としていたため、教科書に出てくるような文学作品をそろえることを優先させていた。それが現在では、生徒たちに読書習慣をつけさせ、読書の楽しさを味わわせることが、図書館の重要な役割に変化してきたため、生徒が読みたいという本、あるいは読みたくなるような本をそろえることが優先されるようになったのだという。この変化の背景には当然、若者の読書離れがあるわけで、まずは何でもいいから、生徒たちに本を読んでもらいたいというわけなのだろう。

第二に、ミステリの地位が向上してきたことが挙げられる。昨今では教師の中にもミステリを愛好する者も多く、純文学至上主義の国語教師は少数派になった。これはミステリが大人の読み物としても堪えられるように進化してきたということの裏返しでもある。現に教師のリクエストに応じてミステリを買うことも多いらしく、筆者もありがたくその制度を利用させてもらっている。とくに東野圭吾のようなベストセラー本は、市立図書館では何十人も順番待ちをさせられてしまうのに、学校図書館ならすぐに読ませてもらえる。また生徒たちにとっても、メディアで取り上げられるような作品は読みたがられる傾向が強く、生徒たちの足を図書館に向けさせるための必須アイテムとなっているのである。

生徒たちが好んで読む本は、やはりラノベやテレビドラマや映画の原作となっている作品だという。東野圭吾、東川篤哉、乙一、米澤穂信、京極夏彦などがよく読まれているというが、貸出回数はこれらの人気作であっても、年間一桁なので、やはり読書する生徒は少数派なのだろう。

次に参考までに、本校図書館におけるミステリ作家別蔵書数のベストテンを挙げておこう。(冊数は延べ数)

- 1位 松本清張 70冊
- 2位 アガサ・クリスティー 38冊
- 2位 東野圭吾 38冊
- 2位 宮部みゆき 38冊
- 5位 エラリー・クイーン 31冊
- 6位 森博嗣 28冊
- 7位 コナン・ドイル 26冊
- 8位 恩田陸 23冊
- 9位 モーリス・ルブラン 22冊
- 10位 松岡圭祐 21冊

やはり清張は別格という感じである。

2. ミステリ啓蒙活動

本校図書館には、専任の司書が配置されており、熱心に読書普及活動をしてきている。この方が筆者がミステリ好きだと知ったことから、生徒にミステリを普及させるための様々な啓蒙活動に協力を求められることとなった。

その第一は、ミステリの読書会である。筆者がナビゲーターになって犯人当ての読書会を行おうという企画である。そこで去年の夏休みに、鮎川哲也の「達也が嗤う」をテキストにして、読書会を開く予定であった。しかしたまたまこの日が、高校野球の県決勝戦と重なってしまったため(本校は見事勝利し甲子園出場を果たした)、やむなく中止、今年も事情により実現できずに終わっている。しかしこの企画は今後必ず実現させるつもりでいる。

そして第二は、本校ホームページ上における、高校生向けミステリ入門書の執筆依頼である。

そこで筆者は「本格ミステリ入門」と題する企画を連載することとなった。今年度は、海外編として全5回を予定しており、現在のところ第2回までが公開されている（執筆者名は本名）。内容は、「第1回 本格ミステリの誕生～ポー、ドイル、チェスタトンなど～」、「第2回 ミステリの女王 アガサ・クリスティー」、「第3回 エレガントな推理 エラリー・クイーン」、「第4回 密室の巨匠 ジョン・ディクスン・カー」、「第5回 その他黄金期の作家たち～クロフツ、バークリー、セイヤーズなど～」であり、詳しくは実際にホームページをご覧ください。（「習志野高校図書館」と検索してもらえれば、アクセスできます。）

とにかく高校生向けという制限がついているので、内容や表現が難しすぎると書き換えを要求される。正直しんどい作業であるが、少しでも高校生がミステリに興味を持つようになってもらえればと願って、がんばって書いている。なお、今後筆者とSRの会の関わりについてのインタビュー記事も公開される予定である。

また、本企画で取り上げた作品は、図書館の方で購入してくれて、特設コーナーに展示されている。入り口近くの目立つ場所に、『ブラウン神父の秘密』や『歌う白骨』などの古典ミステリが、堂々と展示されている学校図書館なんて、他にはそうそう存在しないことだろう。



新連載 4月より開始！

習志野高校図書館ホームページ連載企画

高校生のための《本格ミステリ入門(日本編)》 予告

平成25年度、習志野高校図書館ホームページでは、大村拓先生に5回にわたって、たくさんの作家と代表作を並べていただきながら日本の本格ミステリの歴史について教えていただきます。

本年度同様、お楽しみください。

★内容

- 第1回 「戦後探偵小説ブームの到来」
～本格探偵小説の鬼 横溝正史～
- 第2回 「横溝正史を継ぐ 本格派の巨匠たち」
～高木彬光と鮎川哲也～
- 第3回 「社会派全盛時代の本格推理」
～松本清張 土屋隆夫 笹沢左保 都筑道夫 中井英夫 他～
- 第4回 「〈新本格〉勃興前夜の名手たち」
～泡坂妻夫 連城三紀彦 島田荘司 笠井潔～
- 第5回 「〈新本格〉ブーム到来！」
～綾辻行人 有栖川有栖 山口雅也 北村薫 他～